

令和4年度 とちぎ地産地消夢大賞 受賞団体一覧

応募数: 11団体

表彰式: 令和4年12月10日(土)
とちぎ食育・地産地消に関する表彰式

【夢大賞】

No	団体名・個人名	所在地	タイトル	主な活動内容
1	にほんえいようきゅうしょくきょうかい 日本栄養給食協会グループ	宇都宮市	食べ物で健康と文化をつくる社会！ 捨てるを活かす「やさいくる活動（食循環システム）」の確立！	平成22（2010）年に開設した食品リサイクル工場「エコ・ファームHAGA」（芳賀町）で給食や外食業から食品残渣からの土壌活性液「育くん」を製造し、グループ内の農業生産法人「育くんファーム」で使用。「ごろごろ畑の野菜」と名付けて県内飲食店に提供したり、収穫体験や食育講話を実施。また、茂木町小深地区の小深在来大豆を絶やさないう畑で生産し加工して以降「大豆文化を創造する」のコンセプトのもとで、大豆商品を開発して給食に提供するなど、伝統食の継承や食育にも取り組んだ。

【優秀賞】

No	団体名・個人名	所在地	タイトル	主な活動内容
1	とちぎけんりつうつのみやはくようこうとうがっこう 栃木県立宇都宮白楊高等学校 しょくひんかがくか 食品科学科	宇都宮市	新たなレモンの産地宇都宮から「宮レモン」を活用した商品開発！ ～地域活性化と地産地消食育プロジェクト～	空ハウスの活用や国産レモンの産地化を目指して市内で生産されている「宮レモン」（商標登録）を活用し、食品廃棄物の削減にも工夫した「宮レモンパン」の開発に取り組んだ。農業者との交流を踏まえた情報を、商品販売時にQRコードで発信しつつ消費者アンケート結果を生産者にフィードバックするなど、宮レモンを通じて消費者と農業者の交流を後押しした。この他、とちぎアグリプラザ体験講座において、宮レモンを通じたクラフトコーラ製造を県内小中学生と実施するなど、食育活動にも取り組んだ。
2	うじいえしょうこうかい 氏家商工会	さくら市	「氏家うどん」による地域振興プロジェクト ～地場産小麦を核に生産から加工、消費まで地域が一体的に取り組む～	市内で生産される小麦を地域活性化に活かすことを目的に、氏家商工会内に地産地消推進特別委員会を設置した。JAしおのや氏家地区麦大豆部会が生産し、県内製粉会社を通じて市内製粉・製麺所へ供給。「氏家うどん」として提供する推進店は令和4年現在で市内12店、市外4店へ拡大。平成29（2017）年度にはさくら市ブランド認証第1号となった。子ども向けうどん打ち体験やうどん絵画・ポスター展の開催、さらに昨年度はさくら市友好都市の米国ランチョパロスベルデス市に氏家うどん紹介動画を贈呈するなど、PRを総合的に実施しながら麦生産拡大につなげている。
3	とちぎしきょういくいいんかい 栃木市教育委員会 とちぎけんりつとちぎのうぎょうこうとうがっこう 栃木県立栃木農業高等学校 とちぎしきょういくいいんかいじむきょく 栃木市教育委員会事務局	栃木市	栃木農業高等学校と学校給食のコラボレーション	栃木市と栃木農業高等学校は平成29（2017）年度に包括連携協定を締結しており、昨年度からその一環として大平地域の小中学校に同校の生徒が生産した農産物を用いた給食を提供する「栃農給食DAY」を開始した。取組3日間で約1トンの農産物を活用。これにあわせて農業に関心を持ってもらえるよう、豚や稲の生育状況を学校のHPや給食だよりで発信するほか同校教諭が市内中学校においてドローン技術やIoT技術等のスマート農業の授業を行うなど、同校生徒の地産地消への理解促進に加え、市内の小中学生が農業への関心を高める取組を行った。
4	ゆうげんがいしゃ なかやしいたけ 有限会社 仲屋椎茸	鹿沼市	「ステーキ専用しいたけ」でとちぎのきのこを魅力発信	東京電力福島第1原子力発電所の事故後に、野外生産のきのこが風評被害を受けたことから、鹿沼市のきのこの消費拡大を応援するため、県特用林産協会鹿沼支部会長として「鹿沼のきのこ応援キャンペーン」を展開。イベントを通じた菌床しいたけ販売や調理きのこの提供により、販売促進につなげた。平成30（2018）年に3Lサイズのしいたけを「ステーキ専用しいたけ」として商品化。パッケージにはQRコードを付し、調理例を提案するなどの工夫により販売を進め、令和元（2019）年にかぬまブランドに認定された。ハウス施設でのしいたけ狩り体験も展開し、観光面から鹿沼市の知名度向上に貢献した。

【奨励賞】

No	団体名・個人名	所在地	タイトル	主な活動内容
1	とちぎけんりつとちぎのうぎょうこうとうがっこう 栃木県立栃木農業高等学校 のうぎょうかんきょうぶ しょくひんかがくはん 農業環境部 食品科学班	栃木市	大平山麗ゆずの里PRプロジェクト ～観光客増加への「足掛かり」を目指して～	「大平山ゆずの里」の認知度向上に向けて、観光資源としての「ゆず」を用いた「ゆずマーマレード」を商品化した。コロナ禍でイベント販売が難しくなる中、市内飲食店や和菓子店の協力により、同商品を用いたコラボ商品を発売し、SNS等を用いて広く商品と取組発信を行った。同商品は「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」にて令和3(2021)年のアマチュア部門を金賞受賞に加え、本年にプロ部門で銅賞を受賞した。また、烏山製茶工場の協力を得てゆずのフレーバーティーも製造。市内飲食店で試供品配布を実施した。さらには柑橘果皮成分「オーラプテン」の機能性について帝京大学と連携して検証を進めている。
2	とちぎけんりつもおかほくりょうこうとうがっこう 栃木県立真岡北陵高等学校 しょくひんかがくけんきゅうぶ 食品科学研究部	真岡市	Brilliant foodstuff ～地元食材に光を当てて～	道の駅「にのみや」やJAはが野と連携し、地元農産物を活用した商品開発や消費拡大に向けてのPRに取り組んでおり、昨年度は食品科学科が製造した「いちごジャム」や「米味噌」などを道の駅「にのみや」の北陵高校ブースで販売し北陵ブランドの知名度向上を図った。このうち米味噌は、今後の消費拡大に向け、ホクト生物資源財団による研究助成を受けて醸造中の微生物フローラの研究にも取り組んだ。また、カゴメ(株)との共同研究により「ベジチェック®」を用いた野菜摂取量参考値の算出調査を行い、地域の方々への摂取を呼びかけるなど、野菜摂取量350g/1日を目指した野菜消費拡大PRに取り組んだ。
3	とこいゆすえん うつのみやゆすくみあい 床井柚子園(宇都宮ゆず組合)	宇都宮市	「宮ゆず」として柚子の高付加価値化や六次産業化などの取組み	昭和39(1964)年に100本の柚子を宇都宮市内で栽培開始したのち、他県の技術指導のもとで生産者を拡大した。そののち、結成された「新里ゆず組合」が新品種の種無し柚子の導入や貯蔵技術改良に取り組む、現在では15名からなる「宇都宮ゆず組合」として、市場出荷はせず主に地元の消費者に手軽に味わってもらえる柚子「宮ゆず」として生産。令和元(2019)年には「大嘗祭」に床井柚子園の宮ゆずが奉納された。また、6次産業化に取り組みながら、地元の道の駅、菓子店舗、料亭、ホテル等に提供し、幅広い地産地消につなげている。
4	うつのみやたんきだいがくふぞくこうとうがっこう 宇都宮短期大学附属高等学校	宇都宮市	東武宇都宮百貨店「とちぎと全国うまいもの市」に出店し「まるごと栃木Utanf愛す」を販売	県内観光客の減少の中で、県産農産物を通じたPRにより地域が元気になることを目的に、同校講師の田村大作先生(益子町・グラッセ770オーナー)監修のもとで益子町産のバナナやブルーベリー等のフルーツや、市貝産の鶏卵、八溝山系の生乳などを用いた無添加のアイスを開発し、東武宇都宮百貨店の特設会場(とちぎと全国うまいもの市)にて販売。2021(令和3)年8月の6日間で、合計372個のアイスクリームを販売し、栃木県産のフルーツを広くPRした。
5	とちぎけんりつうつのみやはくようこうとうがっこう 栃木県立宇都宮白楊高等学校 ユウガオチーム	宇都宮市	ユウガオチームのかんぴょう剥きの取組み	伝統的な特産物であるユウガオについて、食育の観点から子ども達に理解を深めるとともに、学生が興味をもち伝承することにつながるよう、かんぴょうの皮剥き等を通じた体験交流会の企画を平成27(2015)年から継続している。生産するユウガオは栃木県干瓢商業協同組合からの無償提供による苗を同校ユウガオチームが栽培し、その技術や歴史を学ぶことで、小学生等へのかんぴょう剥き体験交流の実施や小中学校の栄養教諭を対象とする説明などを生徒が実現している。令和3(2021)年度はコロナ禍で体験会が中止となったが、令和4(2022)年度に入り、保育園児との体験交流が実現。延べ100名が参加した。
6	とちぎけんりつつかぬまみなみこうとうがっこう 栃木県立鹿沼南高等学校 こぶしインターアクトクラブ	鹿沼市	残った野菜苗や種子を活用した「子ども食堂への食材提供」	鹿沼ロータリークラブの支援のもと、令和元(2019)年に発足したこぶしインターアクトクラブへ昨年度から校内ボランティア部が合併し、部員10名が地域ボランティア活動を実施している。農業科の実習で生じたトウモロコシ、ナス、ピーマン、ダイコン等の生育不良の野菜苗や野菜種子を利用して、インターアクトクラブの生徒達が空いている圃場を用いて栽培し市内の子ども食堂に提供した。農業科の生徒達が生産した規格外のものだけでなく、インターアクトクラブメンバー生徒が農業科職員に栽培方法教わり、自分たちの力で野菜を育てて子ども食堂に届けることに至った。